
現状維持？それとも・・・

dos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現状維持？それとも・・・

【Nコード】

N4589J

【作者名】

dos

【あらすじ】

有名私立高校の花菱学園に通う西園寺凜と神埼歩と前野玲は幼馴染。

入学から一ヶ月経った頃、昔引越してしまった幼馴染の波月楓が転入してくる。

三人とも最初の内は懐かしさだけだったが、他の女子と仲良くする楓を見て、今までとは違う感情を覚え始める。

一学年上の楓の親戚のお姉さんも絡んできて・・・

再開（前書き）

初めて投稿します、d o sです。
以後お見知りおきを。

何とも変な小説ですが、暇つぶしにどうぞ。

表現が至らない部分も多々見受けられると思いますが、生暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

あと主な登場人物の設定を。

波月楓

ボサボサ頭に茶色のメガネ。ちょっと鈍い。

視力は0，1しかなく、メガネなしの生活は無理。

容姿は結構整っている。

運動は並だが、勉強は常にトップ3に入る実力の持ち主。

悪戯が趣味という嫌な趣味の持ち主。

西園寺凜

常に冷静だが楓の事になると多少慌てる。

クラス委員を務め、級友からの信頼も厚い。

勉強は楓と同じく出来るが、運動はからっきし。

神崎歩

明るい性格でクラスを和ませるムードメーカーであり、トラブルメーカー。

運動は得意だが、勉強はまるでダメ。

バトミントン部に所属しており、毎日練習に励んでいる。

前野玲

勉強も運動も出来るスーパな女の子。

勉強が出来るといっても楓と凛には勝てない。

楓に対してはツンデレ気味？

安達林檎

楓の親戚のお姉さん。

花菱学園の生徒会長を務め、学園の憧れの的。

林檎も楓には密かに思いを寄せている模様。

再開

幼馴染を巡って、幼馴染たちが繰り広げる幼馴染同士の恋物語。

小さい頃の淡い恋。

引越してしまった幼馴染が突然戻ってくる。

そこから始まる高校生活。

キーンコンカーンコン。

朝のホームルームの時間を告げる鐘が学校中に響き渡る。

クラス委員の『西園寺凜』が号令を掛ける。

「起立っー礼」

号令と共にクラス中が頭を下げ、担任も「はい、おはようございます」と言った。

一斉に椅子を引き、一瞬、教室内が騒がしくなる。

静まるのを待ってから担任教師は続けた。

「今日は転校生が来ます。この辺りに住んでいたこともあるそうなので知ってる人も居るかもしれません」

その言葉に教室中が再び騒がしくなる。

高校に入って一ヶ月。

「こんなに早く転校生が来るなんて珍しいと思うんですけど。男の子ですか？女の子ですか？」

質問したのはクラスの中心的存在になっている『神崎歩』だ。髪をポニーテールにしている。

明るい性格からか男女共に友達が多い。

「男の子よ」

その言葉に男子は興味をなくし、女子は少なからず期待した。

「入ってきて頂戴」

ガラッと扉を開け、入ってきた。

教室に入ってきた彼の顔を見て、三人の女子が反応する。

『!!!』

「ええっと、始めまして。波月楓と言います」

教卓の隣に立ち、まっすぐとクラス全員を見据えた楓は、自分を不思議そうに見ていることに気がついた。

口元がかすかに動くが誰も気づかない。

あーという声を出しながら、思案する。

緊張していると勘違いして、担任の『畑野有紀』は思わず苦笑する。

「波月君、たぶんみんなはメガネで驚いていると思うわ」

そう耳打ちすると楓は「なるほど」と頷いた。
そしてその理由を説明し始めた。

「あーメガネのことで驚いているのですか？」

楓が訊ねるとクラスの半数がコクコクと頷く。

楓が掛けているのは今時、誰も掛けていないだろう一昔前のメガネ。

そのメガネが、彼の顔を覆い隠す。

「本来使っているメガネが壊れてしまつて。そろそろ姉が届けに来るはずなんですが・・・来ませんね」

説明を終えると疑問が解けたようだ。先ほどの不思議なものを見る視線は消えた。

男女共に興味が無くなったようでそれぞれ話し出す。

畑野はホームルームを終了させるべく動く。

「波月君の席はあそこね。神崎さんと西園寺さんの隣」

「あ、分かりました」

カバンを右肩に掛けて楓は席へと向かう。

カバンを机の横に掛け、着席すると畑野は教室を後にした。

それを見届けた楓は西園寺と神崎、それと後ろの席の『前野玲』に話しかけた。

「よろしくお願いします。えっとお名前は？」

「アンタいつまでやるつもりなの？とっくに気付いてるわよ。凜も

「そっでしょ？」

「歩、楓が頑張って演じてるんだから。玲だって話しかけたいのを我慢してるんだからね」

「だ、誰が！！べ、別に話しかけたいなんて思っていないわ！！」

名指しされた玲は一瞬、動揺した素振りを見せたがすぐに元に戻った。

楓は苦笑する。

「三人とも変わってないなあ」

「アンタも悪戯が好きなところは変わってないわ」

教室の、特に男子が騒ぎ出す。

ダサイと思っていた転校生がクラスの美少女、三人と親しげに話している。

自分たちは恐れ多く、名前で呼ぶことなど出来ないのに名前で呼んでいる。

衝撃は凄まじかった。

「メガネも持って来てるんでしょう？そのメガネはダサイわ」

凜が冷静に指摘する。

「・・・やっぱりバレてた訳ね」

楓はカバンの中から白いメガネケースを取り出すと、それを開けて茶色のメガネを取り出した。

現在掛けているメガネを丁寧に取り外し、いつの間にか取り出したもう一つのケースに仕舞い込む。

茶色のメガネを掛けると楓は別人のようだった。

再開（後書き）

どうでしたでしょうか？

文章の誤った点などを指摘していただけると幸いです。
コメントも頂ければありがたいです。

更新速度が遅くなるかもしれませんが、これからも見てもらえたら嬉しいです。

授業（前書き）

うーん、次は授業の前、5分間〰を描いてみました。

玲は僅かながら恋心に気付いています。

凜は無自覚。

歩はどうでしょう・・・。

林檎の登場はまだ先ですかね。

授業

楓がメガネを換えると一人の男子が話しかけてきた。

「やっぱり楓じゃん。懐かしいなあ、オイ」

「お前は相変わらずだな、雅」

細身の体なのに四六時中、菓子を持っている男子。

『天王寺雅』だ。

彼の家は代々、宮司を務めているのだが、彼にそれを継ぐ意思があるかは定かではない。

雅が話しかけてきたことにより、楓は三人から離れ、雅のグルー
プへ挨拶に行った。

知り合いも居たらしく、この分ではすぐに友人が出来そうだ。

「懐かしいわね」

「うん、懐かしい」

「そうね」

楓が居て。

男の子たちと遊ぶけど、しっかりと自分たちの存在を意識して
てくれる。

今の彼も時折、自分たちの方を向いて笑いかけてくれる。

彼が引越してから感じなかった暖かな気持ち。

それが確実に各々の心の内にある。

キンコーンカーンコーン。

授業開始三分前を告げる予鈴が鳴る。

それを聞いたクラスの全員は慌てだす。

「あれ？どうかした？」

楓は雅に訊ねた。

「悪い！今答えてる場合じゃねえんだ。そこにいる委員長たちに聞いてくれ」

雅は確かに忙しそうだ。

カバンから教科書を取り出し、必死に問題を解こうとしている様子だ。

「凜、何だ？どうしたんだ、この慌てようは」

恐らく宿題なのだろうが、この慌てよう。

何かしらの理由があると推測する。

「えっとね、今から数学の授業なんだけど、ちょっと難しいの。だから予習ってわけ」

「なるほど」と楓は頷いた。

授業でやる問題を先に解いておこうというわけか。

そうすれば———否、そうしなければ間に合わないのかもしれない。

そこまで考えて、楓はふと疑問に思う。

「歩は？歩は大丈夫なのか？」

その問いに歩はムツとする。

「部活の前に凧と玲に教えてもらってるから分かるもん」

その子供じみた言い方に楓は少し笑う。凧と玲もそれにつられて小さく笑った。

雅は未だに問題が解けないらしく、「うーうー」と唸っていた。雅の様子を見かねて、楓が近づく。

「どこが分かんないんだよ、三平方の定理の応用な。これはな――」

一つ一つ丁寧に教えていく楓。うんうんと頷く雅。

凧は楓と同じように周りの生徒に問題のとき方を教え。

玲はうつ伏せて寝ており。

歩は授業のノートの復習をしていた。

「と、まあこうなるわけだ」

「やっぱお前は変わってないのな。相変わらずの優秀さだ。ホイ、お礼」

差し出されたのは飴の袋一袋。

いらないと言っても押し付けてくるので、楓はそれを受け取り、自分の席に戻っていった。

するとうつ伏せて寝ていた玲がボソリと言った。

「ホント、頭ばっか良いんだから」

「そうだな、玲みたいに運動出来るわけでもないしな。そう考えると玲って凄いよな」

「……アンタ、罪な男ね」

前より小さく呟いたそれは、楓の耳には入らなかった。もちろん聞かれるわけにはいかないのだけれど。

キンコンカンコンと本鈴が鳴る。

チャイム終了と同時に入ってきたのは初老の男。

「それじゃあ、授業を始めるかね」

それだけ言うと男は問題を黒板に書き始めた。

楓としてはちよつと困った状況だ。

名前を知らないとまずいかも知れない。

ここで「あ、転校生が来てたのかね。それじゃあ自己紹介でもしよう」となれば良かった訳だが。

楓は隣に座っている歩に囁き掛けた。

「歩、あの人なんていう名前？」

「あの人って……。河野先生よ」

河野は一通り問題を写し終え、次にこれを解く人物の名前を書き記していく。

それは主に河野の気まぐれで決定されるため、一回の授業で複数
回答たる可能性だってある。

歩も当てられたらしい。

どうやらそこは二人に教えられていなかった所らしく、頭を抱え
ている。

頼みの綱の二人はといえば、そんな彼女のうろたえた様子を見て、
ニンマリ笑っている。

そこで歩は楓に話しかけた。

「ねえ、楓。これ教えてくれない？」

「凜と玲に教わってるんじゃないのか？」

悪戯心で訊ねれば、押し黙る。

そして、目をパチパチさせると再びこちらを向いた。

「ねえ、教えて」

さすがは幼馴染というべきか。

楓の弱みを突いてくる。

彼は幼馴染三人に涙目でお願いされればお願いを聞いてしまうの
だ。

それは彼の過去に理由があるのだが、今は割愛する。

「まったく、分かったよ。それはな——」

「（あれ、楓ってこんなに……いやそれはないわね）」

近くで問題の解き方を教えてくれる楓の横顔を見て、歩は思う。

どうして私は彼の**ことば**ばかり見てしまうのか。
その時は懐かしさという**言葉**で片付けた、その**想い**。
彼女が**自覚**するのはそう遠くないかもしれない。

授業（後書き）

どうでしたでしょうか。

至らない部分のご指摘お願いいたします。

大まかな流れとしては宿泊学習なんて入れたいと思っています。
宿泊学習編に入るまであと少しかかるかもしれませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4589j/>

現状維持？それとも・・・

2010年12月10日18時50分発行